

平成30年度防災教育モデル実践事業報告書

学校名 大分県立三重総合高等学校

I 学校の情報

1 学校の規模

学級数13 生徒数416名（普通科210名、生物環境科991名、科学メディア科107名）
職員数72名

2 分掌の位置づけ

「防災対策委員会」

（構成員）校長、統括事務長、教頭、主幹教諭、生徒指導主任、学年主任、防災コーディネーター、
外部アドバイザー

（業務）防災管理体制の確立及び防災組織活動の整備、避難訓練の立案、緊急時の対応協議

3 地域環境

本校が位置する豊後大野市三重町は、大分県の南西部、大野川の中・上流域の位置し盆地状をなしている。阿蘇山の火山灰で形成されている地盤の地域も含んでおり、地滑り危険個所に指定されている地域もある。

II 取組のポイント

本校の生徒は、広域から通学して来る生徒が多く、通学中の災害時に自ら命を守る行動を取れることが不可欠である。本事業で、地滑りや地震による緊急災害時に、生徒が主体的に身を守る行動が取れるようになることを目的として、防災教育コーディネーター（中核教員）を中心に以下の取組を行う。

- ① 先進校訪問や公的機関視察で防災教育の取組について調査を行い、その結果をまとめ還流報告を行う。
- ② 以下の科目で防災に関する取組について探究的な学習を行い、その内容を「学習成果発表会」で報告する。
 - 保健体育：救急救命措置の実習
 - 地理：地域の地滑りマップ作成と通学時の避難について
 - 家庭：災害に対して家庭でできる備えについて
- ③ 学校安全計画、防災に関する年間指導計画や危機管理マニュアルの見直しを行うとともに、近隣中学校と相互の取組を共有する。

Ⅲ 具体的な取り組み

実施時期	実施事項
5月	第1回避難訓練（地震による1次避難・2次避難）
8月	先進校・先進地視察（兵庫県神戸市）
10月	防災実践委員会
10～11月	授業における防災学習（保健体育・家庭科・地理）
11月	第2回防災訓練（緊急地震速報端末使用、消防士による講話）
12月	防災実践委員会 学習成果発表会による還流（先進地・先進校視察及び防災学習）
1月	学校安全防災研修
2月	防災実践委員会

○防災教育先進校視察（兵庫県立舞子高等学校 環境防災科）

兵庫県では、全県下の教職員の中から80名程度を防災教育や有事対応を率先して行う震災・学校支援チーム「EARTH」（Emergency And Rescue Team By school in Hyogo）に指定しており、防災についての啓発や技術向上、他県からの要請に応じて防災教育の支援を行うなどの活動を活発に行っている。大分県内でも防災教育に積極的な学校や教職員は存在しているが、全県レベルで組織的に活動を行っている兵庫県の事例は、今後の防災教育や防災体制の充実に大いに参考になると考えられる。

生徒は全県下から募集しており、遠くは赤穂市や南あわじ市から2時間かけて通学している生徒も多い。科長（科主任）の榊田順子先生は「EARTH」のメンバーの一員として、通常の公務以外にも防災教育に関わる活動もされているということである。



視察に来るまでは、環境防災科は消防士や自衛隊などといった防災のプロを養成する科であろうという想像であったが、実際

は防災専門関連の職種に就く生徒は全体の1～2割程度で、その他の進路先は大学や短大、専門学校（特に医療系）など多岐の渡っているとのことであった。ただ、日々の学習活動や進路選択に「防災」の視点を必ず入れて指導を行うという特徴があり、そのことが生徒の主体的な進路選択や学習意欲の向上に、プラスに働いているという印象を受けた。

- ・夢と防災という授業 「花屋と防災」、「テーマパークと防災」など

その中で、自分の夢は「強いお母さんになる！」 ※防災教育の神髄！

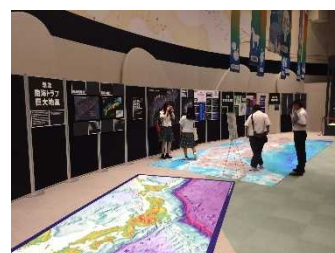
- ・防災は特別なことではない
- ・伝えられたことは、止めるな！伝えよ！！
- ・今を真剣に生きる！普通が当たり前ではない
- ・災害を無くすことはできないが、被害を少なくすることはできる（減災）

- ・「自助」、「共助」、「公助」

○人と防災未来センター視察について（神戸市）

阪神・淡路大震災発生時の資料や街並みの様子、また体験談などをもとに、災害に対する正しい知識を身につける施設であった。被災者の体験談や犠牲者の遺品などを通じて当時の状況を想像すると胸が締め付けられる思いがした。同行した生徒たちも震災の状況に衝撃を受けていたようである。

またこの日は、津波防災の新コーナーがオープンしたということで、我々が最初の体験者となった。内容は実写・CG映像、歩行装置を駆使した津波襲来時での避難疑似体験というものであったが、体験した生徒たちはうまく歩くことができず、津波の威力と恐ろしさを実感したと感想を述べていた。この施設がオープン初日ということで毎日放送が取材に来ており、生徒たちは体験後のインタビューを受けるということもあり、夕方には関西のローカルニュースで放送されるということであった。



IV 取組における成果と課題

○成果

- ・防災教育先進校や先進地施設に生徒を派遣研修させ、学習発表会にて研究発表をすることを通して、全校生徒に対して防災意識の重要性を実感させることができた。これにより、実際に日頃の防災意識を高めることができた。
- ・保健体育・家庭科・地理の授業の中で、防災に関する内容を盛り込み、身近な学習から防災について学ぶことができた。
- ・避難訓練に関しては、1次避難から2次避難への移行の仕方や、けが人を実際に運搬するなど、実際的な非難の仕方を訓練することができた。また消防士の方から、毛布での担架の作り方や運搬法などを学ぶことができた。
- ・緊急地震速報端末を利用した避難についても試行することができた。

○課題

- ・他の教科における防災教育についての取組をどうするか。
- ・学校における防災組織及び役割分担において、実際に災害が起きた場合に指示命令系統が機能するのか（担当不在の場合）。
- ・地域との連携をどのように進めていくか。

V 今後の取組の見通し

- ・他の教科における防災教育を、今年度同様できることから取り組んでいく。
- ・災害発生時に、それぞれの関係機関が連携して組織的に活動できるように、消防・警察・自治体などを交えた横断的協議が今後進めていく。